「おーいっ、おっはよ〜〜ぅ、といすーーっ♥」

少女が割込み、仲良さそうに笑う女子達。

その中に紛れたあの子は　日加里　愛乃（ひがり　あいの）。だが彼女はこの学年のみならず、学校関係者ならばほとんどが知ると言う。
それは美少女たる容姿、愛らしさに優しさ、そして気さくな性格。あと何よりもその全てに拍車をかける、とある特技があったのだ。

それは……。

相　　談

「あのねぇあのねぇっ、私また相談して良いかな、愛乃ぉ〜っ。やっぱり私は愛乃が良いんだっ、愛乃と話すと色々とありがたいんよぉ〜っ♥」
「まーたかぃっ、ちみは本当に面倒ごとを起こすねぇ、ハトソンくぅんっ。それで今度は何〜〜、何かな由香里ぃ〜〜フフフ♥」

「へへぇ〜、ありがと愛乃〜♥　今回はちょっとだけ軽い話だよ〜。私さぁ、、1－2 の後藤君に時々見られてるんだけど、アレは何かって……やっぱり恋愛なの……――」

必死にハトソン君が話しているが、サクッと解決。
　しかももう次の相談を受けている愛乃を見て、俺は感心する。何せ無数の人間達が助言を乞い、彼女だけを頼るのだ。

「日加里　愛乃……。やっぱ人気すごいんだよなぁ。ホントに神様仏様、愛乃様ってやつだ。しかも女子だけじゃない、男子にまで普及してるのは……」

愛乃の姿、それはまさに相談無双――。

相手が見知らぬ男でもキチンと話をし、容姿や陰陽にとらわれず取り組み、真面目に……。

「あぁ、そうなんだ――。つまり相澤君は何度も何度も、身に覚えのない事で怒られやすい　と……、それは辛いねぇ。そういうタイミングに居やすい……ふんふん――。それ　口論しても良いけど、なんでか他の人も好感度も下がっちゃうんだよねぇ～、違うかなぁ」
う～ーーん……。

そこで彼女は提案するのだ、大丈夫そうな事案にだけ現場写メし、そして名刺を渡せと。
名刺を作って無料メールを書いておけば、あまりしつこいのは逃げられるし、文面の方が辻褄合わせやすい。

「あぁなるほど……、思いもしなかったな、分かったよ一度やってみるっ。ありがとうね日加里さん、ありがとーーっ！」

うなずき彼は満面の笑みで走って行く。また直後に別のが来れば……――。

「ふんふん、、、あぁ、あのね――。それは悩みじゃないと思うな～、私。悪いけど私はそういうのは受けません。悩みってね……、私も消費するからね？　今の話じゃ消費したくないの」
ごめんね。

あぁすごいなと、そう何度も思った。
ただでも眺めるだけだ俺は、とりあえず何も俺じゃ――。

そしていつものポジションに座る俺。

体育をしているが、さぼっているし、誰も気に止めない。
ジメっと濡れ感がある体育倉庫の裏、一人座ってボーっと……。

「ね～…ぇ…？　悩みごと……なぁい？」
「あぁ……、いっぱいあるけど無い。寝てれば治るさ――」

そうだ、寝てれば治る程度なのだ、悲しい事に。

人付き合いもまぁそこそこ、自殺願望無し、才能も平均、ネットでもその他大勢、父母普通で怪我なし健康、凡庸という事案に恵まれてしまっている。
それが恨めしいかね、なんだよその眼はっ……、せっかく8尺様よろしく超上空から奇襲したというに、リアクション一つとれない俺で悪いかねっ。

「へぇ……、、そっかぁ。君は悠長でうらやましいなぁ〜〜……な〜んてっ、フフ♥嫌味だよ、嫌味だからねっ」
でもねぇ〜……、、うん
「それじゃ私……、、うーーん……――。まぁ、そっかぁ……」

その顔は普段見せない、なんとも言えない複雑な顔だった。

羨ましいと思っているのは分かったが、ただ、彼女とそれ以上話す事は俺にはできなかった。

「だがそんな私は恋愛マスターだぞぉっ！？　良いのかなっ、良いのかねぇっ！？　必死に興味ないフリしてぇっ、私との距離が縮まるように願うっていうスタンスでぇーーっ」

――。
――――――。

「あぁやっぱ告白とかされるのか、お前」

あんまりビックリさせないで欲しい、いや、マジで。

「あぁうん―――。ごめんねっ、ごめんっ……、、なんか可愛くなるかなぁって……ふふ♥でもそうだねぇ……うん……。やっぱり親身に聞いてるとねぇ、情が分かるって言われて。気が合うとかなんとか……うん」

すごく困った顔の愛乃を見て、少しその話を聞いてやりたいと思った。
だから勇気を出し……。

「オマエ、あした筋肉痛になるぞ、そんな思いっきり上下したら足がぷるっぷるになる」
「うぅん？　もう一人いるよっ」「ウソだろっ！？」「ハァァイッッッッッ！」

大声上げた後にウンウンと――。実際は彼女は一人だった、脚を震わせながら必死なだけだった。

だが勢いでネタを流そうとする悪いクセみたいな感じになり、苦笑の俺と彼女。
その後も彼女は途切れる事なく昼休みも盛況で、そして放課後だって……。

「あぁ〜……、もう廊下まで順番待ってるヤツいるなぁ……。ウロウロしつこいの、あれ堂山だろ。愛乃待ちだろうなぁ、すごいよなぁ」
やっぱ悩みってあるんだな〜……。

チラリと覗く教室ではソレが真剣に向かい合い、そして廊下でもソワソワまだかまだかとするその包囲網。なんとなくもう苦笑いが漏れ出してゆく。
でも俺の方は――。

うなずき、そのまま帰路へと――。

「あぁ、おぃ……、オマエ久しぶりだなぁっ。なんかいつも暇そうだなぁお前っ、ふふふっ。あぁー……じゃあそうだよっ……時間あるしもし良かったらさ、俺の話聞いてくれないかっ、俺に付き合わねぇっ？」

うん……、なんかその、、そこらを歩いてる凡庸にまで手を出す感じ、ワラにもすがるといったヤツ。

むしろヤダわ。

しかしどうやらあの愛乃が目当てじゃないらしい、そこは感心した。

「いやぁ〜……。でも俺はまぁ、、なんもやれんよ堂山、あれとじゃ月とスッポンだわ、本気でやめとけ」

だがなんとか、サブで良いから、何かの足しになるかもしれないんだっ、暇つぶしだと思えばなんとかっ、ギリだからギリっ、等と失礼千万な事を言われ。
だがしぶしぶ収めるのだ、その食べっこっていう、相互っぽいけど永遠に俺のターンっ！と共に座る。

「で、相談なんだけどさぁ……。俺、妹になんて言ってやれば良いのかと思ってなぁ……。携帯持ちたいって、親を一緒に説得してくれって言うのよ。まぁ確かに俺もさ？妹と同じ年にさぁ……」ぼりぼりぼり

なんでお前がビスケット食ってんのっ。

でも恋愛じゃなくて良かった。それにまぁ兄として切実な顔を見ていると、こっちも不憫に思って……。

「それでなっ　それでなっ、妹に話を聞くんだが、やっぱ年ごろかねぇっ……っ何に使うのか言わないのよなぁ〜。それじゃ無理だって言ってもさ、やっぱ泣くし、確かに女の子だよなぁ……、分かってやるべきかなとも……――」

正直いま、罪悪感しか湧いて来ない。

良い感じに合いの手を入れるのも、下手に踏み込むのも好きじゃない。聞いているだけのカカシ――。

しかも家族愛を前にしても早々に眠くなるよ、でもちょっと目をつむれば回復するし、まぁ俺だって、うんそうだよ……そこまで――――――。

「おぃ……―。おぃっ、お前なんだよ……っ、オィちょっとよぉっ……！？」
あぁー〜……、うん、、、これ寝てたかぁ……。
「あぁ悪いな、そうだよな……うぅぅ……」

まぁさすがに謝ろうとすると、堂山が音を立てて駆け出してしまうのだっ！
そして特急で帰って来たら響く声、ありがとうっ！　と――。

お前のおかげですっきりしたと。

「へぇー……――。あぁうん。そか……。良かった良かった、良かったよ」

どうやら聞いてやる事で発散するタイプだったらしい、寝ててよかった。
ただソレは思った以上の変革が訪れる。

「あのさっ……、オマエ俺の話も聞いてくれないか！　なんか勧められたんだ、悪いけどお願いだ、お願いっ……。しっかりお礼もするからよぉっ！」
「あぁ〜……いや、それは無理だな、俺あんまそういうのは……うん――。前のは本当にたまたまだったんだ、知り合いだったからだよ。俺は愛乃じゃないんだよ、偶然の……――」

まぁでも仕方ない、そんなにウルっとした目で見つめるなよ、キャベツ美味い太郎さんだって？　カエルの癖にキラキラネームだもんなぁ。
大容量で学生の友だもんなぁ……。

「それであのさ……、、オレ最近さ、通りの向かいの家から視線があって、それでしかも光線っていうの？　なんかピカピカが頻繁に見えるんよなぁ……。しかもその人オレらだけにしかしてないみたいで、普通の隣人の――」ばりりっ……もぐもぐ。ばりっ……、ぺちゃぺちゃ。

だから依頼料をシェアすなっ。

しかもまぁ、やっぱり難しい内容、隣人トラブルを解決とか俺にはさっぱりだ。
だが頼ってくれたんだ、神経集中、マブタを深く一回閉じた……。

そう思って起きたらいないのだ。

あぁ置いてかれたかなって、ぽつんと一人で思っていると、廊下からすごい勢いで走ってきて――。

「お前……っお前っ、言う通りだったわっ！　あれウチの後ろの光だったわ、ありがとっ、サンキューなぁっ、ははははぁっ♥　言われた通りしたら解決だって　じゃあ……コレやるっ、ほらほらコレもっ、ありがとうっ、とにかくありがとうっ！」
まーじ、ありがとうーっ！

カエル太郎にタラタラやんきー、ちょび髭おっさんプリング等々、もうなんか色々押し付けてくる……っ！
多くてワタワタする俺に、ソイツはなんか知らんが大喜びで、今回ばかりは唖然としていた。

だって俺、寝てただけ――――――。

しかもそこからはもう包囲網を狭めるように……。

「あぁ……、お前っ。あん時はありがとうなぁっ！　勇気出してお前の言った通りしたらアレ良いって……、マジで通ったわぁっ。お前の先生にも大丈夫なんだなっ、すっげぇよ

っ！」
「俺もだわっ。俺、兄貴の言ってた事分かったっ……。遠くに行く前で良かったよ、いやマジでさぁっ！　だからおかえしだよな、食堂おごるから、約束は明日だよなぁっ」

「あぁ良いって良いって〜っ。その代わりしっかり昼飯頼んだぞっ、しっかりなぁ〜〜っ♥」

俺は一気にバブリーになってた。
ただ眠ってるだけなのに、大してどころか何もしてないのに、利益を爆生みするこの相談睡眠っ、永遠に紡がれるお菓子の輪舞っ！
だがしかし、そうなるとさすがに……。

「あぁ〜〜、そうかそうか、俺が眠っｔ……、あぁいやっ、、相談受けてる時ってきちんと答えてんだなぁ〜。うんうん、そうか……、分かったわ――――――」

眠ってる間に何言ったかを調査するが、大体思った以上に目から鱗な事を喋ってるようだ。
むしろ俺が感動するレベル。
しっかり言葉も発し、受け答えし、眠っているようには見えないと、そしてただただその忠告を聞けば面白いようになると――。

「うーん……、なんだこの摩訶不思議の力……、もう神がかってるのは分かるが、でも……、いやでもマズイんじゃ……、俺の意思がどうなってるかってのがなぁ〜……。なんか眠ってる間に乗り移ってたりとか、怪しい催眠でもしてないよなぁ」
俺の体大丈夫だよなぁ〜……。

ばりばり……、もぐもぐモグ。

もう結構人が寄り付いて来るようになり、お布施やら報酬やらでポテト三昧しながら俺が悩み続ける。
俺が知らない知識を垂れ流すオレという、そんな恐怖、そして……。

「それにさぁ、もし俺が本当に答えてるなら、じゃあ上手くいくなって思ったらどうなる……？　不利益になりそうな場合、どこまで俺が介入できるんだ……」

俺はその後、ちょっと鬱陶しい相手で、下らないと思った相談を選んでみるのだ。
そして寝るまでの間に頭で悪態をつき、どうでも良いだとか、失敗した姿が見たいと唱え続けると――。

「オィっ……、お前あのさ……　アレ　確かにやったんだが、ちょ～っと急ぎすぎだったようだわ。なんとなく俺が前のめりだったのかも、まぁ仕方ない、また頼むわっ。ありがとなっ……、ありがと～っ」

「あぁそうか……、うん、じゃあな～～」
……あぁー……そうか、アイツもか、これで2連続だ……
「口喧嘩くらいにはなると思ったが、大した事にならないみたいだ、。どうやら大筋じゃ俺に都合よくなるみたいだぞ。ただ上手くいけって思わないと、旨味は減るっぽい……――」

うなずく。

どうやらこの謎の能力、少しのコントロールができるらしい。
すると今度のは驚きの――。

「やぁやぁ噂を聞いてきたよぉ～っ。すごいらしいねぇ～、私も相談に乗って欲しいよ、さぁ乗って乗ってぇっ♥」
「鳩ヶ谷さん……、えと、相談なんだ？　あぁ……、うん、でもたぶん女性は範囲外じゃないかなぁ。俺まともに話とかも難しいから、フッ……フフ――。女子関係は全くだよ、悪いけどあいｎ、、日加里さんに頼んだら？」

「良いの良いの、私は大丈夫だよっ。だってキミって優しそうだし～、同じクラスで知ってるしぃ～っ。あと何より私ね、愛乃には悪いと思ってて、ね？　だから今はキミに頼みたいんよぉ、キミ頼みだからぁっ♥」

可愛い女子が手を引きうなずくのだ、陰キャ相手にもハトソン君は本当に無邪気で人懐っこいなぁ……。
この子も愛乃の近くにいなければ、かなり持てはやされただろうに。

そして一応話を聞くが、ただ若干軽めでも恋愛の内容だった。しかし今から考えると偵察だったかもと……。

「でねでねっ、それでねっ、あんまり人気無いんよぉ、その子っ。でも正直ねぇ、私が推してる髪型すれば化けるって、そう言ってるんだよ、応援したいのっ。でも全然さぁ～ぁ……」

女の子の話は、寝て良いと思ったら寝れるの早い。即刻睡眠。

そのまま寝てしまい、目を開けたのだが、可愛い笑顔が……。

「うんっ！　うんうんっ、ありがとね〜〜、ありがと〜っ、ふふふっ♥　なかなかだったよキミ、すっごいねぇ〜っ！　まさかあの愛乃を彷彿とさせるなんてだ……――っ。うん♥」

案外女の子でも通用するらしい、この相談睡眠、正直俺でもびっくりだ。

そのまま満足げに彼女は出て行こうとする、あぁ駄目だぞ、コレは何も得られないフラグ、女子はちゃっかりしてやがるっ！

「あっ……――、見ててね――」

するとドアの前、振り返って突然。
ばっ！　とスカートを――。

「あ……エっ！？しましま……、ピンクの……――っ」

驚く俺、その数秒はすごかった……っ！

じゃあねって言われて足早、だが追いかける事もできない。
白の鼠径部、柔らかな印象、モモにかかった黒パンと、そしてドキドキした記憶をしっかり刻むだけしか……！

「えっ……？　あっ……？　エ……――。なんだったんだ……」

しかもやっぱり女子だ、なんか広まりは早いんだ。
もう次の依頼はあっという間で……。

「あぁ……、ごめんなさいね、全然付き合いとかないのに。でも正直キミしかいなくて……えぇ。あんまり日加里には頼めないっていうか、頼みたくない――」

その次は黒髪の似合う、落ち着いた同級生が来た。

どうやらプライドが少し高いらしく、あまりというか、かなり俺も信用してない感じ。言いふらさないでねと念押しされる。

「それでだけど、私、結構前からヒドイ自演をやってたのよ……。自演って分かるかしら？えぇそう、それで似たような事してる子がいて、手口も似ててね……。まぁでも私は気づいたんだけど、ただね――」

その子とは、気づくちょっと前に知り合ってたのよね……。

顔と雰囲気に連動するような、結構な社会問題を話し出されて苦笑するしかない。
しかも話が面白くてスリリングで、聞き入りそうだったが、だがもしかしたら……。

眠ればプライド高そうなこの子がって―――。
――。

「あ～～……うぅー……、えぇと……？　あぁそうか相談……。大丈夫でした～、こんなんで……、あぁえと……」

俺は寝起き。

目をこすりながらもあのドキドキを思い出し、美少女を探すが、今度は突然パンツがあって……っ！

「十分よ、ねぇほら、コレ。これで良いのね……」

目の前の光景にひたすら驚く。

その大人な少女はガニ股で、その惜しげもなく晒す下着は大人っぽくてヤバいっ！
薄緑のパンツだ、恥部を丸出しにした攻撃性の高い格好、素人にでも分かる積極エロで……。

「あぁ……っ、あのっ！？　あぁマジか……しかもなんで指を……うぅっ！？　指でまさぐったら、そんなとこ……う゛ぅぅっ！？」
「えぇ？　でも約束だったのよね……。まぁでもこんな事、他の子には頼めないかもだわ、特別よ。じゃあほらほら早くね、とにかく出さないと」

思った以上に素面で俺のズボンを外そうとし、トランクスを撫で回すのが本当にエロい。
積極的に動く細い指がその隆起から離れず、しっかりと擦ってくるのだ。例えこのまま出して変な顔されたとしても、もう良いかなってなる位に。

こんなプライド高そうなのに、既にヤル気があると思った――。

「ハァ……っ、ハァ……っ、じゃあ、あの……――、、お願いします」
「あぁうん、出たわね……、こんにちわじゃないの。じゃあするから、はぁ……ふぅ……

んぅ――――――。んふ……」

ぢゅる……っと舌が絡んだ瞬間に、飛び跳ねる程の衝撃が先っぽから伝わるっ！
思った以上に分厚いヌルヌルの感触、とんでもなくうごめく衝動、その今まで感じた事のない絡まりが繰り返され……。

「ん、ふ、んぅ……、、う　う　う　ぢゅぅ、結構大きぃ方……。でも気持ち良いのね、かなりヒクつくわよ」
「あぁぁっ……っ、そんな、ベロベロべろべろとっ……。そこまで色々と舐められたら意味が分からない……、カリに先っぽに、根元までとかぁ……っ」

先っぽはすごいが、だが全てが未体験で最高で、手でシゴくだけじゃ分かりえない感触があると教えられる。
ヌルヌルぬるぬるヌルヌル――。その落ち着いた顔つきで、しっかりと舌使いするのがエロいのなんの……っ！

「あふぅ……う、う、、、んぢゅぅ……ん、ふ、んぶっ……、あら、ちょっと急ぎ過ぎ？でも私ふつ」

]ぶびっ……、ぶびゅるるっ、びっびっ、びぃいーーっ！　びるるっ

「きゃあ……っ、ちょっと……、あっ――あぁ～～……、フフ♥」
早すぎぃ……んぅ――。

顔を汚すザーメンにも微笑むだけ、むしろシゴいてくれて出し切れる喜び。かなり可愛いんだこの人。
するとその俺の情けないおチンチンに舌を再度這わせ、今度は深く……。

「でもサービス……、まぁ、全然硬いから、んぢゅ……――♥　んぉぉ……おふ……、うぶっ、ぐ♥」

俺の肉棒を一旦クチの中にいれ、その後ザーメンごとしっかり舐め上げていく姿に、俺は耐えがたい幸せを感じる。
だがまた漏らす訳にもいかず――。

「頑張ってよ……、頑張ってるわね……はぁ……ふぅ……っ、んぶっ――。ん　　ん　　ん　ん　んぢゅ♥」
「口のナカの方が良いわよね……ホラ……、どう、はぅ……ぅ゛、ん、おっ、んぢゅっ……ぐっ、、、ぶっ――♥」

俺は終始腰が引けていたが、だがそれに潜り込むような感じで深くフェラして来る、それがエロい。
むさぼられて熱々の口のナカ。
先程のベロ責めよりカラダの芯まで熱くなる程の……。

「あぁこれね……、上級なんらっへ、喉よ、んぅ……、、、お゛ふっ、ん゛ぐっ、んぅ……――」

喉奥締めという高度なテクニックらしい、後で名前を知るが、本当にヤバかった。
口のナカで締め付けられる感触、舌のザラザラがへばりつき、吸われて引き込まれ……。

「良いわよ……出ひて良い、頑張りました……ホラ、ぢゅぢゅっ、んっ……んぉお゛おっ……♥」
「あぁ……、そんなにくわえ込んだら、う゛ぅ……うぐっ！？　駄目だ出るよ、出るっ、もう我慢できな――」

びるびるびるっ……ドプンっ、どぴゅるっ、びゅぅぅぅ……。

「んぅ―――！？　んぉ……はぁ……っはぁ……っ、ふぅー～……、あぁ……彼氏にも口内させた事ないのに――」
ふふ……、でもいっぱい出たわね……♥
「ありがと、また頼るかも……フゥ……フゥ……」

口元をティッシュでしっかり拭いて、卒なく俺のも拭いてくれる大人な少女を見つめる。
最初からもうなんか驚き過ぎてて見れてなかったが、今見るとやっぱりパンツえろい、ガニ股もやばいっ！
俺はでも放心するだけで目いっぱいだ……。

出て行こうとする彼女にも声をかけれず、どこまでもどこまでも――。

「ハァ……っ、ハァ……っ、ハァ……っ、こんな事まで俺……。マジか、、マジなのか。彼女作るのもまだだったのに――」
ヒクヒクと震える肉棒を見つめながら、俺は心底恐ろしくなる。
「寝てるだけだぞ、寝てるだけでこんなに――」

だがでも俺が何年も願っていた事が今、手に入り始めている気配、ソレは眠っただけで手に入ったのだ。
今からは積極的に女性を狙いたいと……―。

「よっ、相変わらず悠長してる～？　アレからどうかな、相談な～ぃ？」
「あぁっ……愛乃っ、日加里かっ……、ないぞ俺はっ、むしろお前はないか――ッ」
それは口をついて――。
――――――――――――――――――――――――――――――――。
「おぉー……う？　なんだいなんだい、少しは言うじゃないか～～、ふふふっ。あぁでもすごいんだってねぇ、聞いてるよ～～。うん、、ただねぇ、やっぱりちょっとかなり――」
えと……、あんまりそっちは駄目っていうか……
「やっぱり少し変だよキミ。その不安、私に相談すれば良いんじゃないかな――？」

だが俺は愛乃のその言葉にうなずくだけだった。むしろ俺が相談を受けるとにじり寄ると、愛乃はかなりフキゲンそうにする。
それで断られたが、実際コッチもこんな不思議な事言える訳もないし、それにやっぱり――。

「あぁ……、うん、今回は君が相談だね、うん♥」

それでさくっと寝て。そして起きたら目の前でパンツ見せのガニ股になり、しっかりお口する女の子が見れる。
だがもう驚く事なくて――。

「あぁ……っ、口の感触って全然違うんだなぁ――」
あっ、あぁ……、ハァ……っ、ハァ……っ、、良いぞ……っ、良い――。

もう堂々とおしゃぶりさせてやるのだ、しっかりと根元までくわえやすいように突き出して。
「ありがとねぇ……ありがと、アドバイス良かったぁっ……。だから頑張っちゃうから、んっ……んぅ♥　んふぅ……んぉ、ん、ぢゅっ」

俺の肉棒をおしゃぶりしながら嬉しそうなのが更に良い。
この子は後にも先にも群を抜いて上手く、そして妙にベロ粒がスゴイと感じた。削られそうな程に舐め上げられて、ベロンベロン犯されるように……。

「あぁ……あふぁ、、大き　んぉ……んぅっ、んふぅ♥　でも成り行きとはいえ私、教室は初めて、しっかり見張っててね……」
「ん、ん、ん、おぶぅ……うぅっ、それでさっさと出しちゃおうね、じゃあねぇ……、、前彼はコレ好きだったぁ～」
ん　ん　ん　ンォ……っおふっ、ど～ぉ♥

「うほぉっ……！？　すごい良いよ、こんな違うんだな……う゛ぅっ」

「良いんだやっぱり、結構通用するんだ～。じゃあ次の彼にもしよ～っと……あぁ…はぁ……、あぶっっ、、、んぢゅっ♥」

彼氏でもないのでなんかエロい事を普通に言ってくる。
かなり上級者っぽい舌使いを楽しみ、そのまま震えると……。

「私飲めるよ、頑張るから、ほら　ん――――――、、んぅぅっ――！？　んぶぉっ……――、んぐ――んゞ　！？」

本当に飲んで見せた、驚いた。
もうなんか色々違って、別に可愛いと思わない子とでも全然良いと思ってしまう、むしろエッチぃ目線が止まらない。
そしてある時はその巨乳を好きなだけ触らせてくれるという、ムッチリした藤岡さんも……。

「うわぁ～……、すっごい揉むねぇ……キミ。別に良いけどねぇ、、あぁ～～……――、ぅ――すご、うふふふ♥」
「でも相談の途中でこんな事に……うぅ、んぁっ、あっうっ、はぁ……っはぁ……っ、こんなの要求されるなんて、フフっ♥まさか狙われてたかなぁ～」

強く願っただけだから分からない。

まぁでも、すっごい良いカラダだ、もっちもちのムッチムチ。
それでも顔は太くなくて泣きボクロがあってセクシー。その魅力的な藤岡さんは本当に、好きなだけ揉ましてくれる。
細い子が好みだったのだが、しかし、その大きな大きなオッパイはどうやらＧカップらしくて……。

「あぁ……あはぁ…♥　あぁ……ふぅ　んぅっ……ンっ、、、やらしっ……、それ乳首探してるんだぁ」
「あ　あ　あ　あぁ……うぅ　そんな指でクニクニくにくに……はぁ……はぁ……、ねぇ、そんなに見つけたい？ふふ♥」

「いや、藤岡さん、でもそりゃ気になるでしょうこのオッパイだと、ハァ……っ、ハァ……っ、かなり目に留まるって男子でも有名だ、この大きさはさぁっ……。でもやっぱり触ったらすっごいグニグニ、良い匂いもする。でも……、、なんか服が滑るな、掴めないのが……っ」
「えぇ～？　じゃあ脱がして大丈夫だよ～？　むしろボタン取れそうだし、じゃあ剥いちゃおっか、ね♥」

そのデッカイぱいぱいをシャツから解放してやると、色っぽいブラジャーに包まれた壮絶ボリューミーな肉玉が……。
だゆんっと重力に惹かれるのがエロく、その吸いつきを増すような肌の感触。
ブラジャーの上から自由に……。

「あぁ、、、あぁんっ、あっ……ふぅ……、いきなり乳首ぃ……♥　でもやっぱり乳首なんだ」やらしいなぁ〜……♥

「くふぅっ！？　あぁ……、あふ、ア　ア　うっ……、でも、なんか焦らされてるようになるねぇ、ハァ……っ、ハァ……っ、ねぇ」
やっぱりブラジャーも脱がす？
「うんうん　どうぞぉ、良いから良いからぁ、んふ……んぅ♥」

ブラからお目見えするピンク、俺はそのチクビの登場に浮足立ち、必死に先っぽだけを触り続けていた。
色っぽい少女は少し困り顔だが、次第にアツい吐息を漏らして必死な俺に笑いかける。

「ハァ……っ、ハァ……っ、はふぅ……、んぅ、、、指スゴイ……、がっつき……。ちょっと痛いけど、でもね、良いよ……」
「あっ、あっ、あっ、あぁ……あふぅ……、んぅぅ♥　あぁでも苦しいの、やっぱり硬いよねぇ…キミの、おっぱいだけの約束だもんねぇ」

困り顔の藤岡さん、俺は興奮してイライラし、その柔らかムッチリなお尻に少しでも当てこすろうと自然と腰を揺すっていた。
あんまりこの子達、最初のお願い以外は応えてくれないのだ。
だが我慢できない、かなりお尻が深くて良いのだ、そこは熱くてムレてて……。

「あぁ……、う゛ぅっ、ん　ん　ん！？　すっごい、、お尻に入って……しつこいのっ」

「はぁ……っ、はぁ……っ♥　でも実は私も人のこと言えない……、ちょっとだけだよ、少し……触ってみる？」
「そう……良いよ、ハァ……っフゥ……っ、そこだよ……下、もっと下、、んぅ――――――♥」

その言葉に、そのフレンドリーな雰囲気に、俺はもっちり肌に指を這わして、そしてスカートの中へ。
そのパンツの割れ目まで触ると……、あったかい。
俺は初めての感触に撫で回して振動させ、スジの部分を探り当てるように……。

「あぁんっ♥　次はこっちだぁ……、ハァ……っ、ハァ……っ必死なの、じゃあどうしようか、コレはでも……あぅぅ……っ、、んぉお、、ん゛っぐっ♥」
激しっ――。
「押し込むのは……そんな、、あっあっあっ……あぁあっ♥　もう、しょうがないなぁ……♥」

どうやらナマもギリ良いという感じで、興奮そのままにパンツの中に手を侵入させようするが、その時の感触がえぐい位エロかった。
パンツの締まりが俺にそこが境界線だと、その中に入るのは特別だと、温いその――。

「あぁー……、藤岡さん、すごいわ。本当に割れ目なんだなぁ……♥　指が埋まっていくんだ、コレどこまでいけるんだ、本当に深いぞ……っ、、はぁ……はぁ……、深い深い。温かくてズッポリ……」
そしてびしょびしょだ――。

「あぁ……っ、あぁんっ♥　ヤダすごぃよっ、、しつこくて激しっ、んふぅ……っ、ん　ふ」
「そっかぁ……、でもねぇ……色々初めてなんだ、しょうがないか」
ね……？　んちゅ――♥

ちゅっとキスして来て、そして俺の指を持って笑ってくるのだ。
少し手首を抑えられて固定され、俺の目を見て唇を疼かせるので、こっちもキスして笑いあう。
自然な合意が形成されて俺はバクバク……。

「あっあっあっ、そうだよ……、うまいの、上手♥　そう優しくねぇ……、優しく、くふぅ……、ンっ――、んぅッ♥」

俺は生まれて初めて、女の熱いナカを知る。
その指がズッポリと入ってしまう感覚に驚き、あまり動かさなくても濡れると言われて更に……。

「あっあっあっ、ハァ……、、、あぅうっ……、んぁあ……♥　すごいそこ……、ソコは、そこぉお……っ♥」
水音が響き始め、すると俺は我慢ならなくなってペニスを外に出してやる、散々布で擦った熱々の息子だ。
その様子をただただ見守り、藤岡さんはお尻に擦ろうとするのを指で……っ。

「はぁ……っ、はぁ……っ、コッチの方が……、気持ち良いよ、ん……んぅ――――♥」

挟まれるモチモチ女子の、その太ももお股、俺は必死に擦った。
時折おチンチンの先っぽを押して支えてくれて、熱々ぷにぷにのワレメに押し込んでくれる。
この子の肉はなんかすっごいエロくて吸いつく、絡みつく、くわえ込まれ――。

「あぁ擦れちゃう、すっごく擦れちゃうね　あぁ……う゛ぅっ、、あっうっあっ、、あぁん♥」
「いっぱい駄目……はぁ……っ、ふぅ……っ、私も濡れちゃう、キミのおチンチンすごいよぉ、はぁ……っはぁ……っ、じゃあねぇ……私も少し……んぅ♥」

切なげに自らパンツをずらし、肉感を感じようとしてくるムッチリ少女。
そのバッチリ濡れたマンコの熱さと、吸いつく太ももを余すことなく堪能、少し毛は濃いめ。
ムチムチ、モチモチ、そのままモモに挟まれながら発射してしまって……。

びるるっ……っびゅーーっ、びゅっ、びゅっ、、びゅっ、、、びるるんっ

「んふぅぅ〜〜ッ♥　ぅ　んぅ―――ハァ……っ、ハァ……っ。あぁでも、2人共が気持ち良くなっちゃったねぇ……。まぁでも当然かな、えっちだもんねぇ、ふふ♥」
「ハァ……っ、ハァ……っ、ごめん、スカートに塊ついちゃったな、ごめん、う゛ぅっ。でも最高だわ――」

そのスカートとムチムチ美少女の指を汚した精液に、俺は達成感を覚えて震える。
だが夢中だったのでオッパイ忘れてたのだ、それでイヤラシく揉むが、嫌がられる。
すぐに帰ろうとする藤岡さん、なんとなくエッチに持ち込もうとしても上手くいかない、セフレとかを要求しても全く手ごたえなく……。

「でも相談はすっごく良かった〜、私また来るかも」
じゃぁねぇ――♥

「ハァ……っ、ハァ……っ、待って、あぁクソ――。あのふかふかエロ肉メッチャえろかったのにッ……。あれ見ちまったらあと1回位は……っコレじゃ全然物足りないぞ、だけどでも無理だ――」
俺もう2回も睡眠してる、もう寝れないわ〜……
「大体さぁ……、女の子も全員からは選べないしさぁ。それで最後までいけないし、今回はかなり頑張ったのになんでだよ――」

今の最大の悩みは、どんなに頑張ってもその先を、セックスまで行こうとしても案外いけ

ない事。

理由は女の子に聞いても分からないのだ。

だがまぁ確かに、そこまでの行為を相談一つで、悩みを解消した程度で与える事はないのかもしれない。

「それにやっぱ悪用してて大丈夫かなぁ……って、うん。いつかしっぺ返し来ないかねぇ。彼氏持ちかも分からない子いるし、たださ……。それでも全員が了承してるのは確かだわ。悩みが解決してってんだよなぁ……——」

夕焼けに戸惑う俺、疼いて次の日も……。

「あぁー……、よっしっ、今度はこの子だ。じゃあもう誰でも良いから早く来いって——」

メール送信。

すると座っていた机の目の前、突然カバンが置かれた。

「こーらっ、あんまり怖い顔しないのっ、相談する方が遠慮しちゃうでしょう……っ」
「なっ、なんだ、愛乃——っ。愛乃やっぱり相談かっ、相談なのか！？　ん！？」

俺のその言葉に、ちょっと挑発的で、少し怒りを含んだ顔で見つめてくる。

「いーえっ、私が意見を言いたいのっ。ちょっと雰囲気違うよ〜って。ゼッタイ何か相談あるでしょ、絶対だよねぇっ……。うん——、ほら。じゃあ聞いてあげるからっ、今日のはキミが解決するまでやります！」
「いや………っ、、俺は別に特にないぞ、マジで無い。むしろ相談待ちだからさ……。だからお前が相談無いなら用は無いんだよ、帰れよっ」

その言葉に愛乃は驚き——。
————————————————————。

「あぁ〜……、えー……。そっかぁ……うん。まぁそうだよね………。じゃあ素直になるよ。やっぱり少し気になってたんだ私、あなたのその腕前をね、フフっ——」

愛乃がしっかりと席を向かい合わせる姿に歓喜と、そして何より気を引き締める時が来てしまうっ！　最高のチャンスがきてしまったっ！

そしてツラツラと話しを続けるのだが、真剣に聞き入ってしまうのだ。

それはただ単にちょっと興味があった、あの完璧な才女の悩み事だ。だが……。

「あぁねぇ、ちゃんと聞いてる？　大丈夫かなぁ――、うん……」

俺は真剣に聞いてるのに、その彼女の不安げな様子にやはり駄目だと痛感、やっぱり素の力は何も変わっていないと……。

（大体さ……、もしコレを逃せば、全てのチャンスは終わりかもしれないんだぞ……―。まだ納得いく効果はないけど、でも、今回だけは絶対なんだ。愛乃は絶対、必ず――――――。）

頭の中ではもう、なんとか俺の睡眠で彼女をと。

「ねぇ……――――――」
それは初めての感覚。

「ねぇ……ぇ……、ねぇって、……起きて……、ほら起きてよ」
相手に起こされたのは初めてだ、耳元の優しい感触、俺はこしょばくて顔を赤らめた。
ただ大仕事だったのか、俺自身かなり眠っていた感覚があった、一体どうなってるのかと――。
「あぁー……うーん…――？　あぁ俺、確か愛乃と……　愛乃ッ……。そうだ愛乃はどうなって―――っ！？」
そして追い求めた彼女のその姿は―――っ！

「……？」
「……？」

夕暮れの中、俺は舐めるように見つめる、魔法がかかっていないかと、声がかからないかと、ずっとずっとだ。
だが今回は様子が違う、見つめ合う形になってしまう。まるできょとんとし……。

「あぁ、あの……、えと愛乃？なんかないか、相談だったろう……。そうだ相談どうなった、上手くいったかっ、なんかほらっ……――うん。相談途中に約束とかしなかったかなってっ……！」

「んー……、相談した話なんだけどねぇ、すっごく君のアドバイス良かったよ～っ♥　正直感動した位だからっ、本気で助かったのってっ、ただ、えー～っと、、お礼の話はされたけ

ど」
少し行きすぎじゃないかな〜って、うん
「それでもう　終わったよ？」
「終わっ……っ、えっ？　　それだけでかっ？　終わる？マジでっ？　えっ、あっ――。本気で終わったんか終わっちゃった」
えっ……、え゛ぇぇ――――――。

「うん……。でも私知ってるよ〜。それはやめた方が良いよ、まぁそれは、確かに？　別に無理やりって訳ではないし、うん、、それが魅力って言われれば、でも」
私は嫌かなぁ……って。
そう言うだけ言って、あっさりと帰ろうとする愛乃。
どうやら本気だ、初めての失敗に驚く俺、必勝を期したハズだ、動揺が隠せない。
もうどうしたら良いのか分からないが、それでも……っ！
「あぁいや……待って……――、待てって愛乃っ、あぁあの、いや……っ。用事って訳じゃないんだがっ……」
だが残念だが、普通の会話さえままならない。
もう離れていく気配、その俺が完璧に夢想していた彼女の肌が、手に入るはずだった日加里の唇、愛乃の声と胸の膨らみが――。
（なんでだ、なんでこの大事な時に発動しないッ……。俺こんなすっげぇ力あるのにどうしてだよっ、なんでココ一番で失敗するんだよぉっ！　コレはなんの為の力だと思って――っ。）

その後ろ姿に、迷う。
放課後の学校、2 人きり。愛乃は俺の相談後の話も知っている。
そして俺がしたい事も分かっているのだ。

（このチャンス逃したら終わりかも、いや……、ほぼ確実に終わるんだ――はぁ……っ、はぁ……っ、もう一度なんとか……っちょっと強引でも――。）

彼女の肩を力強く掴んだが、ただ、もう魔法を失った俺では何も届かないと思うのも、事実。
何せあの魔法みたいな話術を跳ね除けるのだ、迫った所で恐らく無理だと考えるべきだろう。
ソレは高嶺の花過ぎたのかもしれない、目を逸らした時――。

「まぁでも良いよ、シテ上げる……」
後ろから抱かれた、抱きしめられてしまった……っ！
そしてズボンに指を伸ばすのだ、少し俺はビクつくが、ただ何よりオッパイが当たって良い匂いも……。

「もうねぇ、じゃあ指でシテ上げる。ほらほら脱いで、もうここしかないぞぉっ」

そう言って急かされる俺は、指なんてと少し残念に思うが、だが少しのチャンスでも逃したくなかった。
良い匂いに柔らかいオッパイの感触、学校1と言って疑う余地のない笑顔。
後ろから彼女は俺の陰部を撫であげるので、ベロンっと出すと……。

「う゛ぁっ！？」

「あぁ……、そっかぁ、そうなってるんだねぇ、ちょっとばかりキミの、、うん」
大きいんだ――。

だがしっかりと俺のをニギニギした後、ゆっくり撫で回してくる美少女。

「フゥ……フゥ……、安心してよ、私相談のプロだよ？　人の顔色見るの得意だもん」
最高に上手なシコシコ　してあげる♥

（右　同方だが少し耳穴にかかり目）

「ねぇ、まず少しだけ見本見せて欲しいなぁ、、私真似して見せるからねっ」

俺の腕にゆびを絡ませて来て、笑ってくる学校一の美少女。
正直恥ずかしすぎる要求で二の足を踏むが、だが、彼女はその気配を即座に感じ取り、したり顔でシャツをはだけて半脱ぎになってみせるのだ。
オッパイの谷間押し付けて、お相子だと、指も急かしてチンチンも擦って……。

「見たいなぁ〜、キミのおチンチンしこしこ。ねぇほらぁ♥」

「そう……良い子、シコシコ……シコシコぉ……、、じゃあこう、かな……」

「こうだ……、リズム分かる、キミのおチンチン、はぁ……っ、はぁ……っ」

「う　ん　ん　んぅ……、この形覚えてくから……、任せてね」

ゆっくりと俺のリズムと、そして肉棒の形を理解するべく指を真似してくる愛乃。
その動きは無理なくフィットさせ、俺と同化しようという優しい動き。
それはしっかりと擦り、冷たい指が必死に撫で回してくるが、いつの間にか熱さまで似てきて……。

「あぁ、、少し止めたりするんだ、はぁ……はぁ……、分かった、ん、ん、ん♥」
でも出ちゃうからかな？

「力加減大丈夫？でも……だいぶ慣れてるょ、ほら、はっ、はっ、はっ、はっ、はぁ……、一緒でしょ」
私の指だよ、それ。

「あぁ……、すごいな、お前の全然……普通だ、俺の指みたいに動き回る、覚えるの早いよ愛乃っ。なんかさっきまで握られただけでビクビクしてたのが、違う意味でヒクついちまう、こんなに良いのかって……うぅっ！？」

「でももっと馴染ませてるからっ、はぁ、、、ふぅ、、、はっ、はっ、はっ、あぁぁ……うん」
ピクピクしてる、、えっちぃ……。
「はぁ……っはぁ……っ、お前もエッチな顔してるじゃないかっ。指も本格的に動かしてる、最初はかなり恥ずかしそうな顔だと思ってたけど……うん。今はなんかエロい事考え始めてるだろっ、なぁっ♥」

「えぇ〜、私はえっちぃ顔とかしてないよ、はぁ……っ、はぁ……っ、はぁ……っ、ふぅ〜ー……、ほらっ！」

指がだんだんと交代して、もう完全に彼女の指だろう恐らくは、気づけなかったが。
マジで自分でしているような気配になってる、すっごい良く分かった動きだ。
他人の指という強引さと無神経さを感じさせない擦りで、しかも貯めようという動きも再現して……。

「ん　ん　ん　んふ……んぅ　ねぇ？　私の指、もう完全でしょ、ふふ♥」

「この実力褒めて褒めてぇ〜、伸ばしてよぉっ、ねぇそうすればぁ」
もっとシコシコ良くなるっ♥

ただ問題は、自分でやってる感触だけではいつも通りだ、365日あり得る現実。
しかし今は違う、後ろからは美しい声、アツい感触、美少女がしっかりと俺の性処理を勉強し、努力する姿。
愛乃の吐息、綺麗な顔のリップが囁き、俺のチンポを射精させにかかり……。

「よしよし。出しちゃえ出しちゃえ……はぁ……ふぅ……、ンぅ――ふふふ♥」

「少しお汁、多くなって来たねぇ……、案外嬉しいもんだねぇ、はぁっ、はぁっ♥」

「う　ん　ん　ん　んぅ……っぁぁ　お背中どうですかぁ、シコシコ良いですかぁ～？　うふふ♥」

「あぁ、良いよ。かなり良い、全然もう任せられるレベルだわ。でもまさか……お前も感じてるか？　なんか声もおかしいし、オッパイこれ……強く擦ってきてるな、勃ってるんじゃ――」

「えぇ……、私？　んーー――、ま　まぁ？実際興奮しちゃうよね、そりゃ」
おチンチンしこしこだし君のは……。

「コレは初めてだから……ふぅっふぅっ、特別　おチンチン相談……ンっ……んぅ――」

少しだけ早くなってる指使いと、そのオッパイ擦り。
可愛い顔が汗ばみ、息遣いも声も申し分なくエロい、乱れても完全に美少女。
愛乃がもう俺の指かと思う程同化してシゴく、その汚い汁まみれになりながら動く指、ぬちゃぬちゃしてくる感触に満足感を感じながら……。

「でもねぇ、ちょ～っと足りないかな……って、でしょ？　じゃあ舐めたげるよ…ンゥ……ぢゅ……首筋　どう、ん、フ、んふ」

「耳もどうだ、えぉ……んぅ、ンム……ぢゅっ、あぁでもね　あ　と　つかないようにする」

少しこそぶったい感触、這いずるベロに身を屈ませるが、情熱的な動きに心動いた。
思った以上に吸いついてくれるし、あと、背丈の加減上俺の事を必死に抱きしめてくるの

が可愛い。
密着しながら吐息を感じ、積極的に首筋と耳をしゃぶられて……。

「はぁ……っはぁ……っ、息ゴメンね、絶対五月蠅いよね、ンュっ……ぢゅっ、う、んふっ」

「んっ、んっ、んっ、んふぉ……ンゥ、、、ごめん……ちょっと跡つけちゃう、やっぱ」

かなり興奮してきたのが分かる愛乃の舌使い、その首への吸いつき方。
ベロンベロンと首筋を舐めたと思うと、ちょっとだけ耳を噛んで甘噛みちゅっちゅしてくるのだ。
そして俺を見て笑うので、良さそうだと思い、顔で割込みその唇を奪って……。

「こらっ、ストップっ！　キスは駄目だよっ、はぁ……っ、はぁ……っ」

「する……って、言ってからしてね」
ねぇ、する……？

「するよ……する、キスするからなっ、愛乃っ。キスだ――、んぅ、んぢゅっ……うっ」

「うん。んぅ……―、んぢゅっ、、んっぢゅ、ふぅ……ふぅ……、あぁ、、えっひぃね、君のキスっ……」

唇を付けた後、離し、離さず、俺が直ぐに舌を入れると顔を真っ赤にする。
だがその後は力を抜いて来てしっかりと絡まっていくのだ、その間もシコシコは止まらない、かなりの満足感。
愛乃は唇を責め立てられる舌に思った以上にあえぐが、きちんと舌を捧げて来て……。

「ンゥ……んぢゅぅっ、んっフ♥　ンァ……あぁ、あふぁ……痺れねるキス……、キミ、上手なの」
相性……かな。

「あぁん……あぶ、、ぢぅ、ンぢゅ……舌絡むの…すごひょ、はぁ…っ、はぁ…っ舌ぁ――」

「キスが気に入ったのか、愛乃。すっごい真似して来るな……はぁ……はぁ……。だった

ら、ほら……、俺はもっとエッチだ吸えるぞ、全部吸っちゃえる。んぅ……んぢゅっ、ぢゅぢゅっ♥　美少女のお口、エッチ汁だ……」

「えぇ…なにそれ、んぅ……、、でも分かった、私も　ん……ぢゅ…ぢゅ…、ぢゅぅぢゅるっ、んぷ……はぁ、ふぅ」
「んぢゅぅ……ぢゅるっ、あぁ激しい……、こんなキス、うぅっ…♥」

お互いに吸いあって、絡まり合う。シコシコが止まらないのを誉めれば嬉しがる。
キスしまくりながらもしっかりとシコシコしてくるのは、それは非常にエロいのだと、そうは愛乃は気づいてないかもしれない。
俺がキスで攻めていると、愛乃もしっかりと擦って擦って、耳と首筋に反撃を……。

「アァ……、あぁん♥　でも…負けないから、ほら、耳も……ンゥ……んっふっ、ヂュ」

「はぁっはぁっ、もう跡残っても知らぁ…ンゥ……んぢゅっ、えぉ……おふぅ」

「ふっ、ふッ、フっ、フッ♥　出しちゃえ出しちゃえ……、はぁっはぁっ」
出してよねっ――。

もうベロベロ舐めて唇を何度も何度もつけ、しっかりと射精を応援してくる愛乃。
プライド的に出して欲しいのもあるだろう、だがそれでも急ぎ過ぎないよう加減もできる少女。
まるで俺の気持ち良いを一緒に求めてくれてる感じ。

「ぢゅっ……うっ、、ンっ、んっ、んっ、頑張れ……頑張れ……ガンバれ……っ、もうちょっと」

「待ってるからね……、大丈夫、受け止めたげるから、はぁ……はぁ……見たいよ、、君の精液♥」

すると愛乃は良い感じに手で覆い、擦りながらも、しっかりと発射物を受け止める感じで待ち焦がれるのだ。
美少女の指コンドーム、もういつ出しても良い、全部受け止めてくれる――。

「ほら……シコシコ、はぁっはぁっ、出しちゃえ出しちゃえっ　射精しちゃってっ、待っ

てる……っ君の……――」

（同方　右だが、少しだけ耳から離れてチンポ確認してる感じ、指に射精されてる。）

「アッ、あぁぁ……！？　あっあっ……すごっ……止まらないねっ、止まらないっ……」

「フゥ……フゥ……、当たってる熱い、すっごい熱いの君のっ……―♥」

ドロドロになってく指、それでもしっかりと彼女は受け止めた。
そして頬を赤く染めながらも笑う愛乃の顔、それは会心と言った愉悦が見えるのだ。
そのキメ切ったという蒸気した顔に、キスしてやると驚き、でも抵抗する事なくキスさせて来て――。

「よく頑張ったね……、こんな量　嬉しい、んぢゅぅ……んぅ♥　んっ、、んっ、、ンぉ……」

「でも元気だねぇ、キミって。私の指こんなにしたのに……うん、すごぃ匂い」
臭い――。

ねばっねばの汁を指に絡ませながら、彼女は息を吐く。
なかなか拭こうとしない、嗅いで嗅いで、俺の方を見て、そしてやめるが。なんかチラチラこっちを見られると俺の病気かと思ってしまう。
ただでも、またなんとなく嗅いでるのが……。

「あぁ、あの、でもね……ぅん――、言わなきゃだ、私も案外興奮したんだ、ホントに。
初めてかもココが……コレ、んぅ――」
こんなに……
「見る　よね、見せたんだから、キミも」

パンツを少しだけずらしてワレメを見せてくる愛乃に、俺はもうたまらなくなる。
ピンクの溝で、それは少し肌色染みてて、美少女のワレメは肌と共に透け通っていた。綺麗すぎるのだ、残り汁を噴いてしまう。
俺はもうたまらず彼女を組み伏し、隠さないよう、自分のモノにするため押し倒し……。

（前　近　殴られてる訳じゃないです、脱がされてるだけです）

「あぁんっ乱暴は……らんぼっ、はぁっ、はぁっ！？駄目だよ…駄目、アァっ！？」

「そんなおチンチン、ヤダ……アッあぁ…擦りつけちゃ、そんなぁっ」
「なぁっ……っ、もう良いだろ、しよって……、濡れてるんだよな愛乃もぉっ！　俺のチンチン手で擦っただけでなんで濡れてんだよっ、したいんだろ、糸引くじゃん、ほらほらっ！」

「う゛ぅぅ……ヤダ恥ずかしいって、アァっ…はぁ……っはぁ……っでもそれ、、挿しちゃダメだよ――」

正常位スタイルでチンポをセットし、彼女の割れ目を横に縦にと開いて刺激しまくる
それでもワレメは硬い様子で、俺は必死に突きまくり、何度も何度も突いているとネバァ～っと汁が引いてる。それは射精汁と割れ目の潮だ。
そしてもっと弱らせるべく何より綺麗な、全体的に充血したチクビも摘まみ……。

「挿さないけど、じゃあ、コレでオナらせてくれよ愛乃っ、なっ！？　なっ！？　それ位は良いだろうっ！？　ちゃんと我慢してるんだぞ、偉いだろっ、はぁ……っ、はぁ……っ、あぁでもやっぱ、良いカラダしてるんだよなぁ……っ、お前」

「あぁぁ……おっぱい、いっぱい触られて……うぅ……ンぐっ、んっアッ、あぁ♥」

「先っぽつぷつぷも、駄目、開くのは駄目だよ、ア……うぅ、ハヒっ、あぅう……！？」

「でも、、ねぇ、そんなにシタかったんだ、ふふ」
ふぅ……、ふぅ……、ふぅ……。

挿入スタンバイされるチンポを見つめ、俺が指で擦っている姿に愛乃が見入ってしばし時間が経つ。
アツアツの割れ目はひくひくと脈打ち、引く事ない欲求を隠せないでいる、ツユが無限に湧いて来ていた。するとぽそりと……。

もうちょっと濡れたら、、、良いかも。

「あ゛ぁ……アァん！？　あの……そんな指で、指……潜らせるのっ、ンォ……おふぅっ！？　んっ、んっ、んっ、んっ、細いとこ、ほじっちゃ……っ、、ワレメほじっちゃダメぇえっ！」

「アァァおくぅっ、奥、ぎゅぼぎゅぼぉっ！？」

ぐちゅぐちゅと挿入した中指を暴れさせ、しっかりとGスポットも擦ってやると悶えまくる愛乃。
俺がしつこくしつこく繰り返していると、潮まで吹き出し始める始末だ。
苦し気にしながら指に狂い、愛乃は必死に俺を抑えて首を振り……。

「もっ、もう良いから……」

「分かった、じゃあ繋がろうっ……」

もう堪忍したという顔でもあるが、だが我慢の限界、トロけが透けた。
そしてうなずくと愛乃はすぐに、迅速に入ってもらえるよう準備をし、俺のチンポにしっかり割れ目を差出し、半クワエ状態。
直通の位置に来させるのだ、俺はそのままグッと、ピッチリと締まった穴の中へと……。

「はぁ……っはぁ……っはぁ……っ先っぽ、形そのまま……ンゥ――、、うぅぅ――」

のけぞるように彼女がその、入って来るチンポに顔を歪める。
かなりの締まりだ、それに何よりヒダが多いとハッキリ分かる美少女の穴は……。

「あぁ、、アヒィ！？ハァ…ッあぁッ、太いの…キミの、私の中っ選り分けられて――」

「アッ、あっ、あっ、あぁあ奥ぅ…っ、入って来るぅ、お腹進んで……押し込まれて――」
ぷつりっ。

「あ゛ぁっ……う゛っ、まだ…入って来てるっ、こんな深くっ　ア゛っアッ、　あぁぁあああっ！？」
「えっ！？　あっ、処女……――。お前処女なのか愛乃っ――」

「くォっ……奥ぅ――。ふぅ……、ふぅ……！？　えぇ……？あぁ……、うん、初めて」

そこも相談だったじゃない、ハァ……ハァ……
「やっぱり疑似恋愛で　お腹いっぱいは、良くないよねぇって」

その言葉に俺はうなずく、まぁあれだけ他人の恋愛事情に耳を傾けているとそうなるのかもしれない。
だがこんだけモテての処女はスゴイ、興奮する、俺は興奮そのままに処女美少女の敏感な中を擦り上げて……。

「あぁイツぅっ！？ごめっ、無理ぃ！？」

「あぁぁっ……、ぅん――、優しいよね、そういうの　す……ふぅ……ふぅ……好き――。それは好き」

目いっぱい止める愛乃が顔を真っ赤にして微笑む。
だが俺もマズイ、凄まじい処女の締まりに挟まれ、そして何よりそのヒダの多さだ、本当にびっしりとビッシリひだひだ生えている。
ヒダ穴チンポでの揉みしだきは最高で、まるで搾精で、明らかに名器だと……。

「あぁ……、うぅっ、あんまり見ないでぇ……、本気の目、恥ずかしいよぉ……」

「でもしょうがないだろっ、こんなに可愛いのと見合ってたらそりゃさ……っ。大体こんなに締まるんだぞ、我慢してるんだっ、お前締まり過ぎなんだわっ。それにあと……うぅっ、なんでこんなヒダが多い……すっごいぞ……っ！　うごめいてる　ひしめいてる、チンポ擦って、あぁ……ヤバい……」

「ヤダ……、乳首、そんなにしたら…アっ……あぁん！？あぁぅっ、あっあッハッ「１」いっぱいコリコリぃ、興奮してつまんじゃ　ヤダっ……っあひぃ、ヒィイ♥」

「あとそれに恥ずかしい事も……ふぅっふぅっ、ヒダ多いとかもやめてょっ、馬鹿ぁぁっ……」

その乳首はピンっと張っていて、結構他の子より存在感があると思う、勃起チクビすると転がす抵抗感がすごい。
高速でコリコリしながら見守るが、肌もきめ細かく良い体、すこぶるスゴイくびれ。
明らかにオッパイ大きく、ホワっと温かい、そのたっぷりボリュームを揉みしだいて……。

「はっ、アッ！？はひっ！？あっあっう゛、ふぐっ、乳首だけでココまでされるんだ」

「うほぉっ！？　すっごいヒダがうねる……うぅっ♥　多すぎだってヒダ、そんな量でチン

ポ擦るなよ……う゛ぅう゛っ♥　指に乳首引っかかる度にマンコがキュンって締まって、チクビの興奮だけで吸い尽くすかって位に擦ってくるっ！　ひだがくわえ込むぞ愛乃っ、敏感なんだなぁお前……っ！」

「ぅぅっ　ンォっ、そりゃ……、、反応しちゃうよ　こんなの、フゥっフゥっ、こんな大きいの　キミに…挿されて」

「熱いの入られてる、変になるの…アァっ……あひっ、あぁ……あぐっ、、ん、ん、んぉっ、おふぅぅっ」

だが苦しくとも愛乃もチクビで我慢できないらしい、処女でも、訳がわからなくても体を揺すって情動を逃がそうとしている。
だが揺れれば揺れる程に吸いつくヒダ、愛乃の割れ目が俺の下半身に絡みつく。
その動きはゾワゾワする程だ、俺ももう擦りつけるように体ごとチンポを……。

「うんっ……ぅん……っ、動く、、良いよそうなるんだ、擦れて、はぁっはぁッハァッ！」

「あっあっハっ、ゆっくりねっ……ゆっくり、、擦るのはもぅ良いから……うっ……うぅぅ♥」
「大丈夫なんだな、もう痛みは引いたんか、アツアツになってるもんなナカっ。これすっごく汁が溢れてくるぞ愛乃っ！　グジュグジュ言ってる、大丈夫そうだなっ……良いぞっ、すっごく締まってヌメるっ！　痛みがないなら擦りまくりたい……！」

「すごく痛くてもね、、大丈夫なのはなんででしょう、はぁ……っ、はぁ……っ」
大丈夫……大丈夫だ。

俺を離さずに、しっかりと首を抱いてそのピストンを受け入れる処女。
かなりの美少女だ、少し痛そうなのも可愛くて、それでも感じてる姿は本当に尊い。
俺の一部がしっかりとカラダに入って動くと、う゛ぅッと唸り、同時に肉ヒダの群れがムレムレと……。

「あっあっあっ、あぁあ♥すごいでも……突かれて」
「あっ　深ッッ、あぉぉっ！？お゛　ぁ　ヤダ、、ここまでなんだ、深すぎるよぉっ」

「あ゛っ　あっ　あっ　はっ、この感触、やっぱ続くんだ、この――コレは――う゛ぅ」
「ヨダレ出てるぞ、愛乃っ……。すっげえ感じまくってんじゃんっ。でもお前のおマンコ本当に名器だなぁ……、ギュンギュン締まる♥　ホント一体化しそうに締まるけど、しっかりとヒダが擦れる感触残すわぁっ。ザラザラでじゅるじゅるっ、擦るの止まらねぇっ！」

「ヒッ、、ひぃいっ……らめぇっ、突いてっ……ん…ん゛ぅぅっ！？それで乳首引っ張るのはぁっ♥」
突かれながら切なげに涙を拭き、息を切らして悶える美少女。
かなり初めての感覚なのだろう、声が上ずったりして相当苦しそうにしている。
だが、ずぼずぼと自分に入り込むチンポに抵抗する事もできず、カラダの内側を刺激されるのだ、敏感な女の中を俺のカリ首で……。

「あんっあんっあんっ、アァぁあ！？頭、、おかしくなりそっ…駄目……ふぅっふぅっダメェ、こんな切ない壊れちゃう、もう抜いてぇっ……」
「でもすっごいお前のヒダうねるぞっ、気持ち良さそうだけどなっ！　俺はすっごい良いぞ、どんな感じなんだよっ。痛いのかっ、嫌なのかよっ！　せっかくの処女だろうにっ」

「きひぃっ！？いっ、ひぃいっ、ヒィっヒィっ、痛いとかじゃ、、痛いも…あるけどっ」「１」
「感情がっ……、涙止まらない、はぁっはぁっはぁっ、心壊れちゃうよぉ……ぐすっ」

「でも気持ち良いんだろっ、それがセックスだわ、気持ち良いんだよっ、慣れないとだぞ……っ。大事なんだ、きちんと分からないとだな、おらっ、どうだっ、言ってみろよっ！もうだいぶ良さそうじゃねえかよっ。感触とか、どこが良いとか嫌とかさっ！」

「ん゛ぉっ……！？んぅぅっ！？　ん　グ　そんなに突いちゃ……恥ずかしいのもイヤぁっ」

「ん、ん、う、んぉっ……おぉんっ♥　おぁ……っ続くの……、君の硬いのでナカ突かれるっ」「やだっ、クリトリスまで　そこ…っ、そんなに責めちゃぁっ　アッアッあふぅっ、、あぁんっあんっ！」

泣き叫びながら俺の責めに悶え狂う愛乃。
イヤがる姿は本当に処女らしい、明らかに悶えて戸惑う姿だ、責め立ててやる。
涙目の処女のオッパイを吸ってやったり、クリトリスして責めていると、もう堪忍した様子で疼いた体を抱き……。

「言うからっ、言いますっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、あぁあの　ね、すごいんだよ、君のは――」

「熱いのずぶぅっってされるとね、脳みそ来ちゃう、これ……この、ぁあッ……アひぃっ、あ、あ、あんっ、あぁんっ、ヒクついちゃぅっっ」

「君の引っかかる度　これ……すごいの、すごい入られる、オふっ！？おぉふ……っんぐ、ぅっ！？気持ち良……っっ♥」
「なんだよ良いのかよっ、処女の癖にこんなに腰使って吸いついてんだもんなっ！　チンポの感触に喜んでんじゃん、おらっ……！　オラオラっ！　うにうにヒダが動いて擦れるぞっ、突くたびにすっげぇうごめいてる、気持ち良いんだなっ！？　俺のチンポ良いんだよなぁって！？」

「あんっあんっあんっあぁんっ、良いっ、良いよ　これ…すごい、これおチンチン良いんだよ、絶対ぃっ」

「君のおチンチン良いっ、キミのおチンチン気持ち良いの、すごいよォオっ！」

鳴き声を上げて淫らに悶える愛乃に、俺は満足した様子で突き込んで見せる。
ズッグリと入り込むと、上質できめ細かいヒダヒダが吸いついて締め付け、包み込み、俺のチンポを離さない程。
愛乃は硬い感触に観念し、切なげに抱いて来て、ヨダレひく唇をアピールし……。

「ねぇチュウしよっ、チュウ……んぅ……んぢゅっ、むっうっ、んぷっ……はぁっはぁっ」

唇を離すと耐えきれない気持ちを必死に、俺にだけささやくのだ。

「おチンチン良い、おチンチン良いよ、もっと刻んでよ……っハァっハァっ、キミのを刻んで欲しいんだ私…ッ」
しっかり見つめてくる美少女、その後、無茶苦茶になるまでキスをする。

「んぢゅ……んぅ――♥　ん、ん、んっ、ンォ……おぷっ……ぶぷっ、んぢゅぅっ……ウッ♥」

「む、うっ、んぉ……ぢゅっ、ん　ん　でもあの、キスもでも……好きだからね、大しゅき、んぅ――」
絡み合う2人の舌、それは非常にはしたない音を出すが、もうそんなのどうだって良い
繋がった下半身、ウネリ狂う肉ヒダが俺の肉棒をピッチリとくわえ、腰で擦ってやればもう背筋に来るほどの快感がえられる、それは名器。
ヒダヒダやばい、すごい量のヒダヒダがやばい、ヒダヒダひだひだ……――。

「ヤダ……、どんどん早くなって……アァ……、あふぅっ、は、あっ♥　アァう！？」

「ぇっぇっ怖ぃよ……―、こんな早いの怖い　アッ……あひぃっ！？　あっあっウッ、かはぁ！？」
「コレ……まさか、あのっ…それは駄目だと思うよ、駄目、あぁっ…あぁあっ！？　あ、アヒぃいっ――」
「イク……っ、もう駄目だイクぞ愛乃ぉっ！　はぁ……っはぁ……っ、駄目だ、これすごい締まりで全部揉み出されそうなんだっ。ヒダヒダすごい、俺のチンポ根元から先っぽまでビッチリとへばりつくっ！　こんなにヒダヒダがぁ……っ。うぅっ！？　イクぅっ！？」

「ぁぁ、あふぅ　ハッあっ♥やだ……駄目ぇっ、中は駄目だってぇっ……「1」ん　ん　んん　んぉっ、早くなっちゃ私の…我慢できなく…うぅぅ♥」

「ひぃっひぃ！？いひぃいっ！？すごい……、、、すごいすごいスゴイ、激しいの――」
だが俺は慌てる愛乃を抑え込み逃さない。
ブルンブルン揺れる胸、こんなに美少女だ普通いないレベル、無茶苦茶に興奮して俺はもう中出し以外は考えられない、駄目と言われても出したいんだ。
すると押さえつけてくる俺に、自ら抑えられやすい位置に入り……。

「ふぅ…っふぅ…っ、痛く…しないでね」
女という受け皿になるのだ、しかもこれは誰もが憧れ、そして俺が望んで来た子宮。
その覆い被さってくる大きな体に、俺の肉体から脈動を感じる愛乃は、そのまま抱いてピストンを一身に受ける。
ザクザクぐじゅぐじゅ、ずぼずぼっズッボズッボ。

「はっはっハッ、あぁっ♥あお゛ォっ！？あぁ……たまってくんだ、たまってる……」
「熱い　マグマみたいなの溜まって、いっぱい……いっぱいぃっ、いひっ……ヒィいぃっ！？」

「あっあっあ゛っあぁぁっ硬いの激し　こんな擦られたららめッ、おかしくなりそ――ッッ」
ニジニジ粘着質で泡っぽい音を立てながら、俺達の結合部が、連結が固く締まってく、繋がっていく。
愛乃のマンコはもうギュウギュウ、ずっとギュウギュウ挟んでくるキツイ。
俺ももう熱くて熱くて、形が一切変わらない程に硬い肉棒を、女の奥に突き挿し……。

「もう駄目っ、君のおチンチンで噴いちゃう、もらしちゃぅ、あぁ……、あぅぅうっ♥」

「かはっ、イクぅぅ、飛んじゃうからっもう飛んじゃうっ、そんな硬いのでぇえ！？」
「おらぁあっ！　イケっ、イケっ、イケっ、俺のチンポでイケっ！　中出しだオラぁあっ！」
びゅるるっ！　びゅーーーっ、びゅっ……びるるっ　びっ、びぎゅるっ、ドボォッ

「アッ、アァっ！？イグッッ、イクぅうううううっ！？　――ハァっハァっあ゛ぁ…駄目、まだ続くの、奥の奥゛、、う゛ぅっ、、う゛ぅぅぅっ！？　突っ込まれてる精子っ……キミのお汁ぅ……」
さすがの愛乃でも、奥にぶち込まれる熱さにケモノのように脈打つしかない。
悶え狂いながら必死に壊れないよう、頭が飛んでしまわないよう抑え、震えている美少女の中へと俺は注ぎ込んだ。
俺は硬い肉棒を挿したまま、深く深くへと……。

「やっと止まった……終わったの、はぁ……っはぁ……っはぁ……、ぐす……うぅ」
ヤっちゃったね……―。
息を吐き出すだけの愛乃は動けない。

汚れた自分すら治すのが怖いのだ、割れ目からの熱い感触、これをどうすれば……、これからどうなるのか。
この先の自分はコレを知った状態で生きるのか、男と女の感覚が変わってしまうとさえ思える……。

「……――」
だがなんとかパンツだけは穿き、静かに零れる汁を拭い、髪を整えるのだが……。

「あぁ、あのさっ、愛乃……っ。日加里　愛乃っ！　俺とさっ……、付き合って欲しいんだっ！　俺はずっと好きだったっ、俺はお前が好きだァっ！」

「えっ、ヤダよ。だってお悩み解決してあげたお礼にシタじゃない」
そう言って自分の処女の血をティッシュで拭い、ブラも綺麗に直して服の汚れにも気をつけて。
そして、気だるげに机に座る同級生が、あくびをして――。

「まぁ……申し訳ないけどねぇ……。解決するまでが仕事だから、うん」
分かってね……。

そのあっさりした雰囲気に、俺は何か訳が分からなくなるが、もう言葉はハッキリ聞こえた、落胆するしかない。
だがそれでも少しでも可能性がと、久しぶりに俺は熱く……。

「あぁ俺さ、でも、あの……っ、分かった気がするよっ……。この不思議な力がなくてもココまでヤレたんだ、自信できた気がする！　告白はさっ……なんか断られたけど、でも良かった……っ、必要なモノが分かったんだ！　ありがとなっ……、ありがとう。なんか腹が決まったっ！　だからもう少し頑張らさせてくれっ、諦めたくないよっ！」

「うん……――――。えっ、それで解決？　あぁ……、私何かしたっけぇ……。まぁ良いや……、相談聞きすぎてもう疲れてて……あぁ～～ぁっ……」
「１」寝てただけなのになぁ――。

彼女は首を傾げ、疲れた様子でドアを開けて出て行った。
その後の彼女は悩みから解放され、高校生活は充実し志望校にも受かったそうな。
そして俺は――――――――――――――――――――――――。

さてあとがきです。
この作品ですが、まずは声をあてていただいた

柚木朱莉　さん

ありがとうございました。

あと音楽等を使わせてもらった

魔王魂　さん

ありがとうございます。
それでこの作品ですが、とりあえず最後からの続きはありません、こういうテイストのお話です。
エロゲーですし続きはなんとでもやれますが、まぁ核としての部分は完結してますね。
ただ残念な事はＡＩ絵を使えればねぇ、良かったんですけどね……。ざっくりとクォリティーが上がりますよ。
でも面倒な僻地に飛ばされるんで……、今は無理ですね、はい。
ただその残念さを含めて、猫板家工房として初めてのバイノーラルでした、いかがでしょうか。
見ているとこのタイプが人気なようで……。
しかし物書きとしてはこの　エロだけで完結し、かつショート位の長さしかできない、また男のセリフがなくても成立する。という、ストーリーなる物をへし折りに来てる概念。
そんな音声作品。
これを頻繁に書く気になれず、遠ざけてきましたが、いかがだったでしょうか。
あとそれに困難なのは何より音声の調整もですね……、あれもちょっと……えぇ、リアルに苦痛ですね。繰り返し続けてると頭割れそうになるんですわ。
他作品見てると 2 時間とか 5 時間近いのありますけど、あれホントどうなってるんでしょう。耳聞こえなくなりそうで怖いです。
ちなみにこの作品、ある種バイノーラルとしては不完全なセリフの繋がりかもですが、小説とゲームがあるんでって感じで作ってます。
特に説明じみたセリフがほぼないのがどう出るか分かりませんが、個人的にはいらないと思って作りました。
大体 18 禁ゲーだと一度読めばセリフ位は想定済みで飛ばしですし。
バイノーラルでも字の参照元がしっかりある分、ちょっとセリフの繋がり分からなくても良いかなっと。
どうだったでしょう。
作品としては 1 万文字＋エロなんで、ちょっとしたネタしかやれてませんが。

もし面白いと思っていただけたなら別の作品を、是非是非、お願いします。
もう結構マジで、声優さんの代金を払うのも難しくなってますんで、よろしくです。
小説が売りです。なんでも書いてます。エロくない題名だけど物語性を重視しつつ、しっかりエロいっ。

かなり本気でエロいです、販売促進文章は壊滅的な私ですが、是非っ！

どうせ安売り一切しないんで、見たらもう買ってもろてえぇんやで？

企業負担の安売りがある時だけは別でチャンスで〜すっ！

ただアレのパーセンテージ、コロナあたりから渋くなりましたよね――。

そんな感じでよろしくお願いします〜、ではまた、どこかのあとがきで〜〜。